

最近では、イランカラッテがアイヌ語の挨拶として知られるようになりましたが、日常的には「食事を取ったか」というのが最も一般的なものでした。



アイヌ社会の挨拶や礼法

佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

食料の全てを自然界から得ていたアイヌの人々が生きてゆくために最も大切だったのは、「食べる」ことでしたが、食材の獲得は、天候や猟運の有無に大きく左右され不安定だったこと、また漁期中は、和人に本州向けの商品製造に従事させられたため食料調達ができず、日当代わりに支給される玄米もわずかだったためです。明治期になると河川での鮭鱒の捕獲や燃料の木々の伐採も禁止となり、条件の悪い給与地での耕作を余儀なくされたため、食糧事情はさらに悪化しました。

こうしたことから、早朝に出会った者同士は食事をとったか否かを先ず尋ねるのが半ば慣習となっていました。ネッカエエルウェタアン? (nep-何 ka-か e-お前は e-食べ ruwe ta an-られましたか?)、エイペルウェ? (e-あなたは ipe-食事をした ruwe-のか?)と聞きます。もし、ソモ (somo-いいえ) とか、ヘンネ (henne-いいや) と答えれば、エントウライペヤン (en-私 tura-と一緒に wa-て ipe-食事し yan-ましょう) ということが普通だったので、アイヌ社会では食べ物を呉れ惜しむ人は、イペウナラとかイペフナラ (ipe-食事 hunara-をさがす、を呉れ惜しむ) とか言われ非難されたのです。これは人物評価としては最悪で、このような人間だと看做されれば、付き合い合ってくれる人が、いつしかなくなり、いざという時、誰にも助けてもらえません。それだけでなく、食べ物の恨みは末代まで語り継がれたものでした。

他の家を訪ねるときにも細かな作法がありました。男性ならば戸口で咳払い、女性ならば控えめに「オフオフ」と言うのですが、聞こえなければ入口に下げて

ある板を棒で叩きます。これはシフムヌヤル (si-自身の hum-音 nu-を聞か yar-せる)、シフムヌレ (si-自身の hum-音 nu-を聞か re-せる) と言う行為です。そうする

と大抵その家の奥さんか、娘さんが戸口に出てきて要件を聞き、家の主人の許しがあって屋内に入ることができます。

重要な要件で他の家を訪ねるのは大抵、男性のため、訪問者は自分が二心のない安全な人間であること(刃物を隠し所持していない)を証明するため帯を解き、折りたたみ、冬期であれば履いてきた魚皮製靴などを片手に持ち、家に上がります。その時の姿勢は、身を屈めて進み、最初は下座に座って、囲炉裏の火の神と家の左奥隅に祀られているその家の守護神に拝礼をします。次いで、家の主人が指定する座に移って座ります。それから、対座する家の主人に重厚な拝礼をし、その後、主人のキセルをもらい受け、自らのブレンドした煙草を火皿につめ、それを囲炉裏の火にのべて、少し吸って火を移し、自分が吸った吸い口を袖口で軽く拭いてから主人に返します。次に、主人は相手のキセルを受け、今度は自分の煙草をつめ、同様にしてキセルを客に戻し、初めて互いに一服を吸い、相手の煙草の葉のブレンド具合などから、煙草の味で自分への対応の軽重をはかり、客の値踏みをしたのだそうです。

さらに、客が主人の信用を得るためには、単に名乗るだけでは足りず、祖先の来歴や、家の主人と関わる話題なども話し、自分がその子孫にあたるということを示します。そこで敬意を払うに値する相手と判断されれば、神窓側の上座に座るように促されます。勝手に上座に座るのはとんでもないマナー違反でした。自然の中で暮らし一見単純そうなアイヌ社会が、非常に厳格で複雑なルールに基づいていたことがわかります。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~12』(北海道教育委員会、2008~2021年)等。